（別紙１）

論　文　の　内　容　の　要　旨

論文題目　　もの　――現代的実体主義の存在論――

氏　　名　　加地　大介

本論・付録・試論によって構成されている本論文の目的は、〈「もの」（緩やかな意味での実体としての「実体的対象」）であるとはいかなることか〉という問いに対して様相論を中心とする形而上学的観点からの回答を与えるとともに、それによって現代的な実体主義の存在論の骨格を提示することである。

本論第一章・第二章では、「もの」の形而上学的特徴づけの要となる「実体様相」の概要を提示する。

まず第一章「実体様相への途」では、実体様相を次のように特徴づける：実体様相とは、最も狭い本来的な意味での〈もの(*res*)〉である実体（および実体的対象）についての様相としての *de re* 様相であり、それには実体的対象の類種性における「本質」と「力能」および持続性における「過去」と「未来」というそれぞれの源泉に由来する四種類がある。また、言語論的観点からは、実体様相はコプラ的表現によって示されると考えられるので、それらに対しては「コプラ的様相」という呼称も与えられる。その後、実体様相についての理論を展開したと解釈しうる哲学史上および現代の哲学者たちの主張について概観する。

第二章「実体様相の論理形式」では、まず、原始命題を起点として構成される諸命題に対して適用される文演算子によって表現される「事実様相」が *de dicto* 様相であるのに対し、原始命題のコプラによって表現される〈原始的事実そのものの様相的形式〉が「実体様相としての *de re* 様相」であるという形で、両者を対比させる。そのうえで、実体様相は、それが源泉となる事実様相の様相論理の体系を指定しながら事実様相命題の十分条件を与えることによって、事実様相の存在論的根拠（のひとつ）となると主張する。その後、そのような様相的形式が四種類となることのひとつの説明として、〈「類種様相」としての「本質様相」と「力能様相」が、類種性に関する二つの述定形式としての「垂直述定」と「水平述定」にそれぞれ対応し、「持続様相」としての「過去様相」と「未来様相」が、持続性に関する二つの述定形式としての「背顧述定」と「前望述定」にそれぞれ対応する〉ということを挙げたうえで、各様相の基本的特徴を概観する。特に、本質様相と過去様相が事実様相としての必然性の根拠となり、力能様相と未来様相が事実様相としての可能性の根拠となるということが確認される。

本論の続く三章ではそれぞれ、「本質」・「力能」・「（過去および未来の）持続（耐続）」という、実体様相の各源泉についての存在論的解明を行う。

第三章「本質――実体様相の源泉(1)」では、まず、現代における本質主義を、クリプキに由来する標準的な「必然性本質主義」・質料形相論に基づく「質料形相的本質主義」・実在的定義に基づく「定義的本質主義」という三種類に分類する。そしてこれらのうち、最も大きな一般性・妥当性・応用性を見出しうる本質主義は定義的本質主義であると主張し、必然性本質主義はそれに根拠づけられるものとして、質料形相的本質主義はその局所的適用として、解釈される。

その後で、定義的本質主義の主唱者の一人である J. ロウによる質料形相論批判について、R. クーンズらによる現代的な質料形相論を参照しつつ検討する。その結果、ロウが自らの実体定義の改良版において重視した因果的力能の粒度として質料概念を一般化することによって、ロウの実体論と質料形相論を調停できることを見出し、（典型的）実体を〈当該の粒度に応じた質料としての力能的外延が、実在的定義に基づく（程度を伴う）形相的統一性によって個体化された、独立的な「力能的統一体」〉として特徴づける。

そして、実在的定義としての本質がこのような「個体性の原理」として働くということから、本質が実体的対象の同一性基準や実在性基準を与える原理となることや、本質のアプリオリ性が帰結することを導く。さらに、そのような本質様相が根拠となる事実的必然性は、論理語の定義から帰結する必然性としての論理的必然性に準ずる必然性であるがゆえに、論理的必然性と同様、絶対的様相と形式的に一致する S5 体系の様相論理によって表現されるということ、および、クリプキ流の必然性本質主義と異なり、類種性によって重層的に示される個体の基礎的全体性から帰結する必然性であるということが主張される。

第四章「力能――実体様相の源泉(2)」では、まずロウの力能理論と B. ヴェターの潜在性理論を手がかりとしながら、潜在的性質としての力能およびそれを源泉とする力能様相を次のように特徴づける：

(1)力能は、発現のみによって個別化されるべき、実体的対象の性質であり、その様相的本性は、その発現に向かう（または抵抗する）という意味での、程度を伴う一種の可能性としての潜在性である。

(2)その可能性は、何らかの実体的対象に局所化されている点において、いずれかの可能世界における成立として非局所的に規定される可能性とは異なる。

(3)潜在性には、個体の内在的潜在性だけでなく、複数の個体によって担われる共同的潜在性やそれに基づく個体の外在的潜在性も存在する。

これらはヴェターと一致している点であるが、次の点において異なっている：

(1)様相論理によって表されるような形而上学的可能性のすべてを潜在性に還元することはできない。潜在性は、実体的対象に関する広い意味での形而上学的可能性のなかの独特の一種として捉えられるべきである。

(2)反復的潜在性や異なる時点間での共同的潜在性は存在しない。潜在性は、反復も省略も可能な述語

演算子によってではなく、そのいずれも不可能なコプラによって表現されるべきである。
(3)実体的対象のすべての顕在的性質に対して潜在的性質としての力能が対応するのではなく、その中でも何らかの変化やプロセスに（肯定的または否定的に）関連する（能動的または受動的）性質のみに関わる。

そして、以上のような特徴を持つ力能は、結果的にロウが想定していたような因果的力能に限定されることとなるが、そのような力能概念は、N. カートライトによる自然法則論や A. チャクラヴァティによる因果論などの科学哲学的文脈においても利用されていることを指摘した後、実体様相としての力能様相が根拠となる事実様相の体系は、その素朴性・不安定性のゆえに T とならざるを得ないということを主張する。

第五章「持続――実体様相の源泉(3a)(3b)」では、まず、実体的対象の持続（耐続）を複数の「時点」によって構成される時間的多世界モデルにおける貫時点同一性として捉えたうえで、さらに貫時点同一性を R. テイラーが提案した「純粋生成」として解釈する。ただしテイラーは、純粋生成とは「時間の中に存在するということのみによってすべてのものが被ると思われる時間上の経過」であり、「ものが形而上学的な意味において歳を取ることを意味する」と説明しているが、本論文では、純粋生成する対象を実体的対象に限定したうえで「時間の中に存在する」ということを「複数の時点において貫時点同一性を保ちつつ存在する」ということとして解釈し、それが同時に「形而上学的意味において歳を取る」ということの意味でもあると考える。

そして、このようにして規定された持続は、様相的観点から、実体的対象の（現在時点における）〈必然的持続としてのこれまでの持続〉・〈現実的持続としての目下の持続〉・〈可能的持続としてのこれからの持続〉という三種類に分類され、それぞれが時相コプラとしての背顧的・現行的・前望的コプラによって表される実体様相としての持続様相の源泉となること、および、これらのうち背顧的持続を源泉とする実体様相が過去様相、前望的持続を源泉とする実体様相が未来様相であり、現行的持続は両者にまたがる境界的な持続であることが説明される。

以上を踏まえて、A. ガルトンの「できごと論理」と対照させつつ、時制論理に基づく様相論理に対して時相コプラに関する固有公理を加えた論理体系を「プロセス論理」として提示する。そして、過去様相は本質様相の必然性に対して、未来様相は力能様相の可能性に対して、それぞれ並行性を示すことや、その並行性を反映する形で、過去様相が根拠づける事実様相と未来様相が根拠づける事実様相の論理体系がそれぞれ S4 と S4.3 となることが示される。また最後に、こうした過去と未来の様相的非対称性がもたらす時間論上の帰結を簡略に提示する。

本論最終の第六章「総括と課題」では、本論で提示された様相的コプラのさらなる一般化の方向性を示すとともに、本論での考察を次のように総括する：本論で展開されたのは、「ものらしさ」としての実在性(reality)の本源を四種類の実体様相に求めた「実体主義的様相実在論」というべき存在論

であるが、実体様相は実在世界における個体性・因果性・時間性の根幹となるがゆえに「形而上学的様相」と呼ぶにふさわしく、また、実体様相を重視する形而上学は、実在論的・様相論的観点からの「実体主義的形而上学」だと言える。そして「ものである」とは、〈所有する種々の力能を中核とした自己統一性による全体的対象としての「何ものか」として存在し、それらの力能を随所で発揮しながら刻々と（形而上学的な意味での）歳を重ねていくような個体である〉ということである。

以上が本論の内容であるが、その中で登場する実体様相の固有公理および関連する様相論理・時制論理の公理系を付録としてその後にまとめてある。それに続く試論では、本論で展開した議論の一種の応用論として、現代物理学と実体主義的形而上学を関連づける科学哲学的考察を試みる。試論は、量子的対象の実体的性格を分析した第一章「量子論における実体性」と、相対論と純粋生成の両立可能性を主張した第二章「相対論と純粋生成」によって構成されている。